

栄光

説教・「信仰はキリストの言葉を聞くことから」小田神学生……1
特集・環境を守るためにできること……2
西南支区平和講演会報告……4
西千葉教会だより……5
説教・「信仰告白」岸教師……6
第42回日本基督教団総会報告……6
長老のファイル……7
牧師の書斎から……8

説教

『信仰はキリストの言葉を聞くことから』

ローマの信徒への手紙10章9節～17節

日本聖書神学校神学生 小田哲郎



1世紀のユダヤ教についての近年の研究によって、ユダヤ人が律法を守るのは、神がイスラエルと結んだ契約、救いの約束に対する応答であって、義を獲得するためではないことが明らかになりました。救いの中に留まるために神から与えられた言葉としての律法を守って生きる必要があったのです。

「異邦人の使徒」を自認するパウロの批判は、神の救いはイスラエルだけでなく、すべての人にも開かれているのに、食物規定や安息日規定と割礼によって異邦人の隔ての壁をつくり、神の救いの特権をユダヤ人が独占していることに向けられます。一方で、「か

れら（ユダヤ人）が救われることを願ひ、彼らのために神に祈っています」（ローマ10・1）とパウロはユダヤ人の救いも祈ります。

パウロはこの書簡の最初からユダヤ人も、ギリシア人もそして私たちも同じ神、唯一の神を信じるすべての人への救いのメッセージとして書いているのです。人種や国籍による区別はないのです。唯一の創造主なる神は、分け隔てなく人間を救おうとなさるのです。

この時は異邦人のほうが多くなっているローマの教会ですが、元々はユダヤ人でイエスを主と告白した信徒たちが多かったでしょう。そのユダヤ人キリスト者に対して、ユダヤ人社会に宣教することを促すことも、パウロの目的だったのではないのでしょうか。ま

た、「すべての人に」救いを伝えるようにと、まだ福音を聞いていない異教徒への宣教も期待しています。

私は、神学校に入学するまで、17年間タイに住んでいましたが、出席していた日本語教会では様々な教団・教派、教会的背景を持っている兄弟姉妹と共に礼拝を守っていました。多様性の豊かさの中で、使徒信条で信仰告白をし、聖餐によって一つとなる経験をさせてもらいました。そして、「すべての人に福音と神の愛を伝えたい」という思いは、タイでの人身売買の被害者保護の仕事の中で出会いから与えられました。だまされて性的搾取に遭い尊厳を奪われた女性や、強制労働で奴隷のように働かされ生きる屍のようになった男性を通し、この人たちにこそ救いが必要だと考えました。

に、信じられるだろうか？ 宣べ伝える人がいなければどうして聞くことができるか？

この良い知らせ・福音の伝令を遣わす、送り出すのは神です。神の言葉は、神が派遣した使徒・説教者によって宣べ伝えられ、「キリストの十字架の言葉」が聞かれることで信仰が始まる。「イエスが主である」との信仰が生まれるのです。

しかし、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と書かれている通り、聞いても信じない人も多いのです。そのような中でもパウロは命をかけて福音を伝えました。

私が語る言葉は聞かれない、目の前で信仰を持つ人はすぐには起こされないかもしれません。しかし落胆しません。「十字架の言葉は、滅びゆく者には愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です」（1コリント1：18）。

この礼拝に集い、神の言葉を受け取った一人一人をも神は「良き知らせを伝える者」として、この世での歩みへと送り出されます。

環境を守るために できること

現在、地球上では様々な環境問題が起きています。
地球温暖化を食い止めるために、
国や企業では様々な取り組みを行っています。
では、私たちが身近にできることは何でしょう？
あなたが取り組んでいることは何でしょうか？



四通八達の家

岡田映子

新聞やテレビでも盛んに取り上げられているSDGs(サステイナブルディベロップメントゴールズ)

は「持続可能な開発目標」のことで、2015年9月25日国連総会で採択され、地球環境改善のために具体的な目標を掲げて参加しようとの呼び掛けに対し、日本も17の目標を定め、取り組んでいます。

3年前のコロナ禍の始まる直前の12月、このテーマに沿ったイベントが東京ビッグサイトで開催され、私は思い切ってこのイベントに行ってきました。広い会場の沢山のブースを使って数多くの企業や大学がその成果を競い、発表していました。プラスチック製品を自然素材の物にする取り組みや段ボールの丈夫さからベッドを造るアイデアには感心しました。一日では回り切れず、何日も通ってみたいような機会でした。

40年前、子育ての頃、羽仁もと

子先生の友の会に入り、衣・食・住・家計等、より良い生活を目指し実践することに励みました。中でも「四通八達の家」、風通し良くすつきり暮らすこと、持つ衣類の数も少なめで充分であること等憶れていたものでした。

40年経った今は、不要な物に囲まれ「断捨離」を切実に考えるようになりました。70代に始めるべきで、80代はもう手遅れ、とも聞きます。確かに、この頃は老いの坂を下る感があり、時間との勝負を実感しています。

捨ててもよい物は捨てたいのですが、相棒が何でも「取って置いて」と言う人です。足並みが揃わず上手いきません。「捨てない生活」も有るのよ、と言う作家もいます。或る時はバッサリと捨てたり、また或る時はそれを後悔したりする、決め切れない情けない状態です。

先月の新約聖書の学び「テトスへの手紙」で良い行いに励むこと、正しく信心深くする生活を諭されました。もっとゆったりと構え、マイペースで進めたいと思っています。

環境を守るためにWorkation —アンビバレントな試み—

植村泰三

デジタル化社会の進行はここ最近驚愕するほど顕著であり、職場でも個人でも通信手段や相互の連絡また、様々な会議もZOOMで施行するようになってきています。なるほど“paperless”（ペーパーレス）社会は資源の枯渇の現在においては、不可欠な方向性と言えるでしょう。特にコロナ禍の現在においては、“remote work”（リモートワーク）でも十分に仕事が成立することが証明されて来ています。

しかしながら、オンライン授業は教育現場では学生の学力低下を加速してしまい、教育の場における学生と教員の関係性にも変化を生じてしまい、弊害が起きています。大講義による授業の場合にはなるほど密を回避するという物理的メリットはあります。しかし4年間の大学生活のいわば要となるゼ

ミでのオンライン授業は、触れ合いが希薄な個人指導の困難を誘発してしまいます。のみならず、「生涯の友人と知り合い得る場」を相奪ってしまいます。

僕自身の学生時代を振り返ってみても、勉強はしませんでした。ゼミにおける人間関係を通して、有形無形の有益なかけがえない多くを学んだように思います。やはり顔を突き合わせながら、近い距離で共に勉学に励み、友人関係を形成することは、4年間の学生生活の宝であるように思えます。

更に大学院の授業におきましては、学位論文の作成という、いわば命がけの作業を伴います。学生のこれからの人生を決定する分岐点でもあるからです。また、大学院は社会人の方も散見され、授業料を自分で捻出されておられる“tuition payer”（授業料支払者）の意識が大変高い訳です。現在もコロナ禍は続いています。「何がベストか」はかなり相対的であり、多面的に考察を要する時代に来ていると考えられます。

種を蒔く

坂出富美子

私たちの先輩が植物、動物と共に長い年月をかけて作ってきた環境を大事にすると同時に、それらを支配して私たちとの共存関係を維持していかなければなりません。

随分前から耕作放棄地や廃屋が問題視されるようになりました。日本の国土の数パーセント以上が、雑草の繁茂する土地になってしまったそうです。

私たちは結婚して60年のダイヤモンド婚式をりましたが、ダイヤモンド婚式をホテルでの企画を言い出した方や、関係者がジャパンハーブソサエティーの方々に、お礼に何か記念事業をやりたいと考えました。

そこで「ガイヤシーズ」をボランティアで全国の会員が作って、近所の空き地、雑草の茂るところに蒔く運動をして貰う資金を寄付することに決めました。

「ガイヤシーズ」は元々ソサエ

ティーの会員で沖縄出身の故・緒方喜美子さんが『このテーマを普及してください』とスピーチし、「ガイヤシーズ」もこの方のネーミングです。私たちは大変面白くないことだと思っていました。予算も必要だし、行動には結び付きませんでした。そのことを思い出し、その提案を実現しようと考えたのです。

そこで材料は私たちが供給するけれど、作る作業は全国の会員でボランティアしてくださいとPRしたところ、予定を上回る協力者がいて実行することができました。

「ガイヤシーズ」の作り方は、泥炭乾燥粉末・500g、ハーブの種子5gを混ぜ、100ml位の水で練って、手のひらで丸めて1cm位の団子を作り乾燥させます。

近所の空き地、雑草の茂る場所傾斜地にばらまきます。庭や植木鉢に蒔いてもお楽しみ、草花の種を混ぜれば彩も豊かになります。

指先や手のひらを使うことは、作業療法としての意義もあります。屋上緑化、緑のカーテン等、身近でできることから取り組んでいます。

環境保全のために

松田昭彦

今回のテーマである「環境問題」について少し考えてみたい。

干ばつ、豪雨などの自然災害は昔からあった。が、それは産業革命以降、著しく増加している。工場からの産業廃棄物、大気汚染物質、温暖効果ガス（二酸化炭素、メタン、フロンなど）の排出などが自然災害の原因と考えられる。

かつて高校の英語教材でレーチエル・カーソン著『沈黙の春』を読んだことがある。この本は60年前に、農薬の乱用による湖水汚染が原因で野鳥が飛来しなくなったことを示し、生態系保護（エコロジ）運動の先駆けとなった。また、15年前に見た映画『不都合な真実』（ゴア元アメリカ合衆国副大統領制作）も、環境問題を放置する政府を追及するものであった。今では、「エコバッグ」という言葉が流布するまでになった。さて、地球温暖化の要因には、

自然由来のものと、人間由来のものがある。主要因の人間由来のものには、①森林の破壊②温室効果ガス（フロン、メタン、二酸化炭素など）③廃棄物・食品ロスカらの二酸化炭素排出などがある。

ここでは畜産業を取り上げたい。畜産業には、水資源の大量消費、温室効果ガス排出や森林破壊など環境破壊の要因が存在する。

日本では、家畜は農業・林業で用いられてきたが、明治時代に西洋文明が渡来して牛肉を食べ始めるまでは、牛は食肉として用いられなかった。江戸時代以前の日本人はエコロジに優しい生活を送っていたと言える。工業文明・肉食文化と共に環境破壊が始まった。家畜由来の動物性食品の代わりに代替食品を食べれば、少しは環境保全に役立つのではないだろうか。

ドイツ在住の娘の家では週に1回ヴィーガン（植物性食品のみを食べる）を実施している。私は、豆乳を飲んでいり。時々、代替肉（大豆が主原料）を食べている。今では容易に代替食品を手に入れるようになったので。

西南支区平和講演会報告

9月23日（金・祝）台風の影響も心配される中、コロナ禍以来初めてとなる西南支区の平和講演会が開催されました。当日は30名程の参加者を得て、また、ライブ配信も行い、無事実施することができましたことに感謝です。

前半は、足利工業大学名誉教授の牛山泉先生から「自然エネルギーが地球を救う」という講演を聴きました。初めに、衣食住を支えるエネルギーの歴史を振り返りました。16世紀は水車、風車の時代であり、大航海時代も風の力を用いてきたこと。そして1914年

からの第一次世界大戦の間に石炭から石油へのエネルギーの変化が起こり、太平洋戦争は石油に始まり石油で終わったことなどを改めて学ぶことができました。そして現在の災害の増加、生態系の悪化は温暖化がベースにあること、東日本大震災以降、日本とドイツの原発政策が全く違うことなどを分かりやすくお話してくださいました。日本は国策民営のもとに疑惑と隠蔽、一方のドイツは「持続可

能性」をキーワードに「現世の利益のために将来世代に解決不能の遺産を押し付けるのは倫理的に許されない」とする価値観があるとのことでした。

偏在する石油エネルギーから、遍在する自然エネルギーによる平和へと持続可能な社会に向かっていくという先生の思いが伝わってきました。

その後、「平和と核廃絶を祈る集い」として、会場の出席者3名による祈りのあと、教団の世界宣教委員会の「平和を求める祈りーウクライナとロシアを覚えてー」を会場の皆で声を合わせて祈りました。

後半は牛山先生への質疑応答で、会場からは活発に質問が出て、それら一つ一つに牛山先生が丁寧に答えてくださるなど、非常によい会合となりました。人々が集い、ともに話し合うことができる幸せを改めて感じました。コロナが早く収束し、当たり前の生活が再び戻ってくるようにと願わずにはいられませんでした。（大友太郎）

西千葉教会だより

経堂北教会の皆様、ご無沙汰しております。この4月より西千葉教会の伝道師になりました、菊地信行です。皆様に祈りのうちに送り出していただいてから半年が経ちました。そして今も変わらず皆様のお祈りに覚えてお支えくださっていますことを心から感謝いたします。季節も秋になり、やつと千葉での生活にも少しずつ慣れてきたように感じています。

西千葉教会では、これまでコロナの影響で集会を休止しているものもありましたが、少しずつ再開され始めた時期に着任することができたので、教会に集い、交わりを持つことのできる喜びを教友の皆様と一緒に分かち合うことができております。西千葉教会では現在も主日礼拝を2回に分けて守っております。11月の待降節から1回に帰ることを先日の役員会で決定いたしました。夏には宿泊を伴うCSキャンプを実施することができたことも感謝でした。伝道師はCSの分級を担当しないため、なかなか交わりを持つ機会

のない子どもたちと楽しい思い出を作ることができました。また、西千葉教会の行事だけでなく、千葉支区全体に呼びかけて行われる集会も、西千葉教会を会場にして対面で開催されるものも増えてまいりました。その他にも、西千葉教会が大切に行っている集会として、家庭集会があります。その数が全部で11あるのですが、今はコロナのために教会を会場にするという仕方で行っております。それに加えて、コロナが落ち着くまでは集会を自粛されるご家庭もあり、今は約半分ほどが実施されております。赴任してきて最初からそれだけの数の集会がなくて、かえって良かったかもしれないと、教会員からは声をかけていただくことが多かったです。けれども、この先、全ての集会が再開されたらと思うと、十分に準備ができるか今から不安です。今でも多い時には、週に2、3回の講解、説教があるので、その準備に毎日のように追われながら過ごす日々を送っています。

また、礼拝での聖餐式に対しては非常に慎重でした。夕礼拝では出席者が朝ほど多くないため4月から再開いたしました。朝礼拝での聖餐式は来年1月からの執行再開を検討し始めているところです。教会の礼拝における聖餐式の位置づけと、その重要性を改めて思い起こし、そのことを心に刻む忍耐の時を過ごしております。

教会内での奉仕だけでなく、支区の働きや近隣教会の説教応援、キリスト教主義学校への説教奉仕などもあり、忙しくも充実した毎日を送っております。赴任してすぐの頃は、これほど大規模な教会の伝道師が3年間も務まるのだろうかという不安と闘う日々でした。御言葉の奉仕が週に2回以上あることを知った時は、いつか倒れるかもしれないと瞬だけ考えでしまいました。西千葉教会に遣わされて最初に学んだことは「牧師は助けられる人で良い」ということです。これだけ多岐にわたる奉仕にあたらうとする時、その一つひとつを懸命に支えようとしてくださる方が周りに大勢いることを知り、その力の大きさを実感いたしました。何より、今も生きて働いてくださる主ご自身が、いつ

も共におられることの確信が深められました。主に依り頼んで生きることの何たるかを、伝道者として立てられてから改めて教えられたような気持ちでおります。まだまだ至らない点ばかりの欠けだけの器ですが、それでも主が用いてくださる恵みを心に留め、為すべき業を為していくことのできる者でありたいと願っております。

これからも続けて皆様のお祈りのうちに覚えていただけましたら幸いです。経堂北教会の皆様の上に主の限りない祝福がありますように心からお祈りいたします。また皆様にお会いできる日を心待ちにしております。(菊地信行)

説 教

『信仰告白』

民数記6章22節～27節
ローマの信徒への手紙8章35節～39節

岸 俊彦

パウロがこの箇所引用した詩編44編(ローマ8:36)は民族の嘆きの詩編です。大国の狭間にあつてイスラエルは苦難の連続でした。王国は滅亡し、バビロン捕囚となり、その後もペルシヤに支配されました。敵の神々に献げられる犠牲として祭壇の上で殺されるのです。詩人は神の救いを求めました(44:24、27)。

パウロは伝道者としての歩みを苦難のイスラエルに重ねました。一日中殺される危険があつたからです。キリストの福音を伝えたパウロは嘲られ、侮られ、「死の宣告を受けた思い」(2コリント1:9)を味わいました。しかし、パウロと詩人には決定的な違いがあります。詩人は「屠られる羊」に自分を見るのみです。パウロは「屠られる羊」に自分を見るだけでなく、実際に十字架に磔になつたキリストを見ました。「わたしはなんと惨めな人間

なのでしよう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」(ロマ7:24、25)。試練と苦悩の中にキリストへの飛躍があります。逃れの道にキリストの道が用意されています。キリストの十字架の死が私たちの罪の贖いと赦しであることをパウロは確信していました(3:25)。そのため「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と告白できるのです。

パウロは自らの苦難の中にキリストの苦難を見ました。自らの苦難はキリストの死を負うための苦難なのです。キリストの死による罪の贖いが「一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」パウロ自身の苦難によって一層よく分かるのです。

「わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛」(8

・39)に比べ、キリストの苦難にあずかり、キリストの僕・使徒パウロは苦難は忍耐、忍耐は練達、練達は希望、神の愛が私たちの心に注がれていることを聖霊によって確信しました(5:2～5)。

私たちは、キリストを信じる信仰によって義とされ、主イエス・キリストによって神との間に平和を得ています。この信仰によって神の栄光にあずかり、神を神とし、私たちは神の子として、星のように輝く光の子として歩むことができるのです(5:1、2、8:30、フィリピ2:15、エフェソ5:8)。

私たちは、主キリスト・イエスによって示された神の愛に応えて生きるのです。このことに私たちの喜びがあります。私たちの生き甲斐です。

私たちの人生を、私たちの運命を、私たち自身を支配しているのは何でしょう。死、命、天使、支配するもの、現在のもの、未来のもの、力あるもの、高い所にいるもの、低い所にいるもの、他のどんな被造物でしょうか(8:38、39)。これらは私たちを支配する全ての支配、全ての権威、全ての

勢力です(1コリ15:24)。全て主なる神が造られたものです。造られたものは全て死にます。その意味で死は最後の敵です。しかし、キリストは死者の中から復活され、死を打ち破られました。神と共に天におられ、聖霊と共に今も生きて働かれ、私たちのために執り成してくださっています。

私たちは何者なのでしょう。罪人に過ぎません。信仰の小さい者です。不信仰です。いや無信仰です。弱さ、侮辱、窮乏、迫害、行き詰まりの状態です。だから、主イエス・キリストにある神の愛が注がれ、生かされています。この主の恵みは十分です。どのようなことにも、どのような自分であろうとも、私たちが愛してくださる方によって、すべてにおいて勝ち得て余りあります。

私たちの揺るぎない信仰のゆえにはありません。そもそも私たちの信仰がどんなに揺らぐものか知っています。キリストの揺るぎない愛が、私たちがとらえてくださっているから、この主の愛から、どんなものも、私たちを引き離すことはできないのです。

第42回日本基督教団総会報告

9月27日～29日、ホテルメトロポリタン（池袋）で、「礼拝から愛のわざへ―試練の中で日本伝道の推進―」を主題に第42回日本基督教団総会が開催されました。教団総会は2年ごとに開催されるのですが、コロナ禍のため延期、再延期で4年振りの開催となりました。議員総数400人の内335人の出席者でした。

第37回教団総会（2010年）で、沖縄教区は日本・沖縄両教団の合同（1968年）のとらえなおしのため教団名称変更議案を提出しました。しかし、審議未了・廃案となったことから教団と距離を置くとして、それ以来総会議員を選出していません。コロナ禍の総会開催に反対の議員も欠席しました。私は葬儀のため2日目からの出席でした。

4年振りの総会のため、決算予算など法定議案の審議に時間を要し、65議案のうち4分の1の議案が審議未了廃案となりました。教勢減、財政逼迫から教団機構改定が急務の課題ですが、この4年コ

ロナ禍のため17教区それぞれでも協議ができず、常議員会でも審議が尽くされていないことから、総会では今総会期も引き続き協議することを決めたのみでした。総会開催だけで5000万円の費用がかかります。その削減案も審議未了廃案となり、2年後も同じ形での総会開催となることは残念なことです。

5期12年にわたり総会議長だった石橋秀雄牧師（越谷教会）が雲然俊美牧師（秋田桜教会）に交代し、副議長に藤盛勇紀牧師（富士見町教会）、書記に黒田若雄牧師（高知教会）が選出されたことは、教団の世代交代を推進することになるでしょう。主の支えと導きを祈ります。

（岸 俊彦）

第42回日本基督教団総会



長老のファイル

今年3月で68才となりました。

何年も前から高脂血症となり服薬し、定期的に通院している基礎疾患のある高齢者です。74才の夫も定年退職後から脳梗塞、心臓病などで入院が続ききました。今は落ち着いています。「70代、80代の頃になると体のメンテナンスが必要となり、今までの生活を見直しなさいサイン」が出るのかな」と語り合っています。メンテナンスの回数が多くなる老齢期の心の持ち方のヒントが欲しくて宣伝文句に惹かれて何冊か本を読みました。今起きているのにこれから先起こるかもしれないことに不安を感じて生活しない。こんなはずではないと思わず、今の自分の老いを素直に受け入れる。行きたい所があれば行き、やりたい事があればやってみる。楽しんで過ごせば良い。と背中を押してもらえました。

10月第2週の礼拝は神学校日で、若き日に経堂北で信仰を育てられた小田哲郎神学生を説教者に

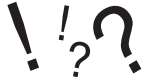
迎えました。小田神学生の御両親に毎月『栄光』を送りお礼の葉書を頂いているので、この日の説教をとっても楽しみにしていました。

礼拝後の長老会ではこれから続く諸行事について話し合いました。コロナウイルスの対策については、感染者が減り、行動制限も無くなりましたが、人が集まる所でのマスク着用は呼びかけられているので教会は今までの感染対策を続けることとなりました。

7月より長老会では経堂北教会の将来を見据えた学びが始まっています。9月には経堂北教会の宣教基本方針とは何か、何故宣教基本方針が必要なのかと、学びは具体的になってきました。今まで礼拝に出席し、牧師が語る御言葉に耳を傾けていれば信徒としての信仰生活は整えられる、とのんきに構えていた私は少し緊張しています。改めて、日曜ごとに通う教会って何だろうと、昔、受洗して間もない頃学んだ「教会論入門」などを引っ張り出して読んでいます。神様が与えてくださった学びの時を感謝しています。

（鈴木こづえ）

個人消息



牧師の書齋から

東京神学大学元学長の大木英夫先生が逝去されました。享年93歳でした。大木先生の名を知ったのは陸軍幼年学校同期生だった鈴木康さんの証でした。母教会の修養会で鈴木さんが大木先生訳の「ニーバーの祈り」を引用されたことによりです。それから『終末論的考察』『ビューリタン』『終末論』を大学生時代に手にしました。現うろ覚えながら思い出します。「現

実主義には罪人である人間の不可可能性の深淵を見つめるとともに、神の可能性の高みを望む『聖なる熱狂』が必要とされる」。

大木先生は1979年4月学長に就任されました。その年私は神学校に入学しました。入試の面接で「君は後ろ髪引かれないか」と尋ねられたことを思い出します。入学式の式辞は「一粒の麦の譬え」（ヨハネ12・24）から、「神学校（ヨハネ12・24）から、「神学校」で生きていることを学ぶ場である。死んで説かれました。1983年3月卒

掲示板

- 幼児祝福式 11月13日(日) 礼拝後
- 創立85周年記念礼拝
11月20日(日) 午前10:15
説教「主にある不屈の歩み」 マタイ20:17-19
中村謙一教師
- アドベント 11月27日(日)
- イブ礼拝 12月24日(土) 午後5:00
- クリスマス礼拝
12月25日(日) 午前10:15 午後2:00

編集後記

▽温暖化対策のため、照明をこまめに消す、使わない電化製品の電源を切る等やっていますが、家族には煙たがられている気が…。(酒井)

「栄 光」2022年11月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

業式でも同じ譬えによって伝道と教会形成に命を献げるよう励まされました。大木先生の学長就任・退任とともに私の神学校生活はありました。経堂北教会を紹介してくださいましたのも先生でした。先生の授業は最終学年の説教演習を受けたのみでした。疑い深いトマス（ヨハネ20・24〜29）について説教しました。原稿用紙10枚を早口で読み上げました。「君の説教は奥さんに分かるか。専攻している新約神学が前に出すぎる」と評されました。提出した原稿を

改めて読んでくださったって「分かる」と後から言ってくさいました。ロマ書の講解説教を続けていますが、先生が『形成』という雑誌に掲載していた説教をまとめた『ローマ人への手紙―現代人へのメッセージ』は必ず読みます。卒業してから『形成』を読むことでこの社会と人間の現実と将来を神学する、また信仰的に考えることはどのようなことか教えられました。卒業後毎晩読んでいたのは大木先生の説教と加藤常昭先生の説教でした。(岸 俊彦)